

まずアミバー赤痢にやられたことですが、ついで南方の戦況があまりよろしくなかったことが原因としてあげられると思います。

中支千里を擲弾筒と共に

滋賀県 足利良三

—入隊はどちらでした。

昭和十七年十二月十日現役兵として、敦賀中部第三六部隊に入隊しました。

—それからどうしました。

内地の軍隊生活はごく短いもので、野戦要員として渡支、翌十八年一月九日第百十六師団歩兵第二百二十連隊第二中隊に編入されました。当時中隊本部は黄土嶺にあり、本隊は大別山作戦に出撃していました。そのため警備の隊員は非常に少数でした。

我々はこの黄土嶺とつぎの警備地踏水橋にかけて約三か月、中西誠少尉のもとで、現役三十人が現地特訓教育

を受けました。

私は擲弾筒の専門教育を受け、一期の教育が終るとただちに先輩が汗水を流して築いた朱頭山陣地に配属され、日夜敵と対し警備の明けくれでした。この警備についていた期間中は擲弾筒をうつ機会がなく、はじめての実弾を撃って擲弾筒の威力を知ったのは、常德殲滅作戦中でした。

—どんな感想でしたか。

撃っていくうちにだんだん自信がつき、作戦中に数十発うつうち十分自信がつき、中隊でもどうやら擲弾筒の足利といわれるようになりました。

—特に思い出深い戦闘は。

それは衡陽の雨母山の戦闘です。当時、野津分隊長のもとで擲弾筒手として敵と対じし、陣地を確保していたのですが、突然敵の大部隊の襲撃を受け、前方の高地稜線から耳をつんざくばかりの至近距離からチェッコ軽機の乱射を受けた時のことでした。

私はただちにこれに応戦すべく分隊長に進言すると、分隊長からくらくらやみのなかだから注意して撃てと注意が

あった。

私は常德殲滅作戦の時に随分撃っているので、自信をもって初弾を発射したところ、みごと、敵主力のまっただなかにか的中し、敵の出ばなをくじくことに成功し、この時は分隊長以下隊員もおそらくホットしたこととと思います。

—雨母山の戦闘は大変らしかったですね。

当時の雨母山の激闘の状況は、湘桂作戦でも第二中隊にとって犠牲者をたくさんだした戦闘だけに、皆さんから中隊史にぜひおん投稿されていることと思いませんので省略させていただきます。

その後、擲弾筒にはますます自信がつき、衡陽攻略戦には数えきれないほど撃っています。

このように小生の軍隊時代は擲弾筒と共に、戦闘に警備に、あるいは行軍に手から離れることなくつづき、昭和十八年四月に擲弾筒手になっていろいろ終戦まで二年四か月の間、生死を共にしてきたといつてよい生活でした。

—湘桂作戦に参加しての感想はいかがですか。

湘桂作戦についてはご承知のことでしょうが、大陸の戦場において最大の規模と最長距離の遠征戦ともいわれました大陸打通作戦が中心となった戦闘であつたわけですから。

無限の人海作戦で抵抗する中国軍の反抗と戦闘資材、軍需品のひっぱくと後方からの補給のとせつと、これにくわえ米空軍の制空権下の行動で痛めつけられ、いつ終るとも知れない行軍につぐ行軍、夜行軍につき夜行軍で兵はあえぎながら八か月かかり、延々千三百キロ歩きました。

時には望郷の思いにかられ、御国のための大君のためと諦観していても、内地への思慕の情はつるるばかりでした。この作戦に参加したのは第十一軍で、秘匿名を「呂集団」と称した軍団です。

作戦参加総兵力は人員約五十一万人、軍馬十二万、火砲千五百門、自動車約一万五千両、石油燃料の補給は困難となるから人力と水路輸送で民船を使用すること等大変なものでした。

作戦期間中の一か月の戦死者は約三千人、戦傷疾病患

者は約一万五千人と推測されています。よく無事で帰れたものと感心しています。

北方では呼応するように黄河畔から信陽まで四百キロ、内山中將指揮する第十二軍約十四万の將兵、軍馬三万頭、火炮二百六十九門、戦車六百九十一両が華北の平原を突破して十九年五月二十日に京漢作戦が終了しました。

――芷江作戦にも参加されたそうですが。

この作戦は揚子江の航行の安全をはかるため敵飛行場の前進基地、芷江を攻略するために企画された雄大な作戦です。

当時、制空権は完全に米軍ににぎられ、その上米式装備で強化された正規軍との対決でありました。しかも敵の二十五個師団に対し、我が軍は八個大隊の劣勢でありました。

昭和二十年四月十三日、歩兵第二十連隊児玉忠雄大佐指揮のもとに進攻を開始しましたが、有力な敵の防御にあい多数の犠牲者を出しました。一個大隊が全滅したとの話もつたわってきました。

悪戦苦闘のすえ、漸く要衝狗狐岩を占領しましたが、敵はぞくぞくと増援部隊を派遣し、我軍を包囲し、じりじり包囲の輪をしめてきました。このままでは八個大隊が全滅すると覚悟した時、五月五日に芷江作戦中止が決定され、五月七日各隊に反転命令が下達されました。

それから想像をぜつする反転作戦でした。反転作戦といえは聞く人には調子がよいが、退却であり負け戦であります。

かろうじて日本軍の占領地区に脱出、人員の補充をえて宝慶全面地区の警備についた。

芷江攻略戦は空軍の協力も弾薬や食糧の補給もない無計画な作戦でした。無謀の一語につきる。したがって芷江作戦は所期の目的を達することは出来なかった。

交戦資料によれば、本作戦中に米空軍の出撃数は延べ一万二千機以上である。それにひきかえ友軍の姿は一機もみえなかったのです。

この作戦は所詮、当初から負けいくさであった。なおこの作戦において我が皇軍から相当数の捕虜がた模様である。戦死した兵は決して消耗品ではなかった。立派

な日本人であったのです。

工兵は作戦軍の舞台作り

和歌山県 森 口 正 一

―守口さんは工兵だそうですが、現役ですか。相当体力があると思うが戦地はどこへ行かれましたか。

私は、昭和十七年二月一日入隊、中部第二九部隊（高槻の工兵連隊）ですが、近くのお寺の常見寺に十日ぐらい泊まりました。その間訓練はなかった。全員で二百三十人のうち「幹部候補生や青年学校卒は前へでろ」と言われ、その人に小銃と実弾（実弾）二十発渡されました。

二月十日ごろ、駅から広島―宇品―中国の呉瀨へ直行ですが、慣れないのに甲板衛兵に立ってフラフラ、一ぺんに船酔いしてしまつた。まあ、二度と九州の山をみることはないだろうと感じました。我々は子供のころからそういう風に教育されていたのかも知れませんが「战友」という歌が実感で、心にしみいました。

―幾日ぐらいかかりましたか、また勤務地はどこでしたか。

四日目の朝ぐらい呉瀨港へ、三日目ぐらいから海が黄色くなった。もう揚子江にはいつていた。河幅が広いので対岸がかすかにみえるぐらい。上陸して行軍で上海兵站宿舎へはいった。街ではシンガポール陥落の花電車が走っていた。

―船には何人ぐらい乗っていたのですか。

他の部隊と合同だった。七千屯の貨物船だったが何人かな。船団は三隻で、私の船はまんなかだったが、前後の船がみえかくれするほどのしげだった。

―初年兵教育は、工兵隊の訓練は相当きびしいと聞いていますが。

初年兵の受領に第一中隊では、将校一、下士官五、六人（工兵隊一個連隊の各中隊毎）ぐらい来ていた。

私は体は頑丈でなかった。入管まで川西航空に勤務していたので、まさか工兵隊とは思わなかった。工兵隊は職人関係、大工や左官が多かった。こんな体でもつかと心配しました。